校長室だより
No.　１１
平成 30 年 6 月 15 日(金)

強く　やさしく

六ツ美中部小学校校長
加藤嘉一（かとうよしかず）

生活単元学習というもの　－梅を教材の中心にして－

「生活単元学習」という学習名は、あまり聞きなれず御存知ない方が多いかもしれません。「生活科のことですか？」と言われることもよくあります。現在は、１、２年生で教科として学習しているものが「生活科」で、「生活単元学習」は、生活上の課題や問題解決のための活動を経験することによって、自立的な生活に必要な事柄を、実際的・総合的に学習する「領域・教科を合わせた指導」の一形態です。

昭和２０年台（戦後）の教育はこの指導形態が主流で、１年生の算数の教科書であっても、川遊びからはじまり、５人を「１人と４人」や「２人と３人」に分解する学習などが計画されています。デューイの経験主義教育が反映されているといわれますが、それに近い考えで今日的な研究の視点をもって、何十年も研究を続けているのが愛知教育大学附属岡崎小学校です。

本校では遠藤先生が先週の研究授業日に、この生活単元学習をもとにした研究授業を展開していました。教材は梅です。１年生の生活科でもよく取り上げる教材で、今回は特別支援学級で実践していました。遠藤先生は、校内になる梅を見て以下のような学びが展開できると考え、指導計画を構想しました。

【遠藤先生が考えた梅の教材性】
０　まずは楽しそう
１　校内になった梅の収穫体験（生活科）
２　梅ジュース、梅ゼリーづくり等の調理の学び（生活科）
３　使用する砂糖の種類の学習（生活科）
４　はかりを使った計量の学習（算数）
５　冷暗所探し（生活科）
６　授業参観で梅パーティー（特別活動）
　　招待カード作成・喫茶店の設営（国語・図工）
　　お店で商売（算数）
　　接客を通したコミュニケーションの学習（国語）

【１の２教室横庭の梅】

先週の研究授業では、一人一人が自分で梅ジュースを作ることができるように、１人１瓶容器が用意されていました。おかげで、子供たちは自分の梅ジュースが作れるとやる気満々です。そして一工夫されていたのが、すぐに梅ジュースに使う氷砂糖を紹介するのではなく、「上白糖」「グラニュー糖」「きび砂糖」「蜂蜜」

「氷砂糖」の５種類の砂糖の用意でした。遠藤先生は、子供たちにとって氷砂糖が、生活経験になじみのないものであることをとらえていました。だからこそ、いつも使う砂糖以外にも、目的に応じて使う砂糖があることを知らせたいと考えたのでした。案の定、子供は氷砂糖を見て「氷！」と叫んでいました。少しなめてみると、全然冷たくありません。しかも、舌先だけでなめているので甘さをあまり感じていないようで、「やっぱり氷。」といいます。今度はゆっくりなめさせてじんわりくる甘さを体感させていました。「今回はこの砂糖を使うんだよ。少しずつ梅のエキスが出て、おいしくなるんだよ。」と教えていました。

３年生の算数では、重さをはかりで読み取る学習があります。ですから、使用する砂糖がわかったところで、今度は氷砂糖の計量です。１年生の子が少しずつはかりに乗せ、３年生の子が 500ｇの重さをチェックします。算数が必要になる見事な場面です。

次は、梅と氷砂糖を交互に容器に入れていきます。どの位の量ずつ交互に入れればよいか、子供はわからないところにも面白さがありました。作業が早く済んだ３年生の子は、蓋がうまくしめられないでいる１年生の子の様子を見て、さっと手伝っていました。異年齢で学ぶからこそ見られた思いやりの瞬間です。

最後に遠藤先生は、「梅ジュースを作るには、暗くて涼しいところにおいて、毎日混ぜに行ってあげないといけません。学校の中で梅ジュースのビンを置く場所はどこがいいかな。」と投げかけました。「ロッカーの中！」「棚のところ！」など、子供はまわりを見回しながら一生懸命適切な場所を探し始めていました。この時間はこれで終わりですが、この後もよく考えて探していました。梅という教材には様々な学習内容と学習の必然性が生まれることを確認しました。

学習は教材の持つ力と指導のあり方で深さの違いが出ると考えています。特別支援教育、生活単元学習から学ぶところが多くあります。

「CO_2削減／ライトダウンキャンペーン」参加のお知らせ

■６月２１日「夏至の日」、７月７日「クールアース・デー」20～22 時一斉消灯

環境省、市環境政策課、市教委が、地球温暖化防止のため、ライトアップ施設や家庭の照明の消灯を呼びかけています。本校の職員も両日において、「公共施設等での照明の消灯」に取り組みます。御理解いただきますようよろしくお願いします。【学校開放は別】